

進め、平安の内に

奨励	若林 裕〔わかばやし・ひろし〕
奨励者紹介	桃山栄光教会牧師 同志社大学神学部嘱託講師 同志社女子大学嘱託講師

だから、あなたがたのためにわたしが受けている苦難を見て、落胆しないでください。この苦難はあなたがたの栄光なのです。こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。

わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

(エフェソの信徒への手紙 3章13―21節)

新島の魅力

新学期が始まってほぼ二カ月経ちました。新入生の方も、学校の雰囲気にも随分慣れたのではないかと思います。春のスピリット・ウィークのチャペルの時、しばし聖書の言葉に導かれつつ、同志社創立者・新島襄について共に思い巡らすことができればと思います。

まず紹介したいのは、若き日に、新島の授業を受けたある学生が、後に綴ったこんな一文です。「いつでも先生が教壇に立たれると、何となく頭が下がるやうに感じた。所謂人格の自然の力とでも云ふべきであらう」（亀山昇『親心の教育』『新島先生記念集』同志社校友会 1940年 152～153頁）と。新島の「人格の力」、それによって授業に引き込まれていったということなのです。もちろん学生たちのすべてが、同じように思ったかは分かりませんが、しかし、みな何か彼に人間的な魅力を感じたのは事実だと思います。何か不思議な力を帯びた人だった、と。

ご存知のように新島襄は、激動の幕末の時代、大きな志を抱いて、命の危険を顧みずにこの国を出ました。その後の10年間は、さまざまな良き出会いに恵まれてアメリカで学び、滞米中に、あの日本史に登場する岩倉使節団と出会い、欧州視察にも同行しています。この時の新島を、使節団の副団長格の木戸孝允は「これから後、頼むべき人物である（後来可頼之人物也）」、つまり「今後、必要となる人物だ」と記し、高く新島を評価しています（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』8 同朋舎出版 1992年 86頁。以下⑧86、本井康博『新島襄の交遊』思文閣出版 2005年 47頁参照）。ご存知のように、木戸は当時の明治新政府の重鎮です。

ついでながら、作家の司馬遼太郎さんは『明治という国家』（日本放送出版協会 1989年）という本の中（7章「『自助論』の世界」、口絵「明治国家とプロテスタンティズム」参照）で、明治がプロテスタンティズムの勤勉、自立などといった精神と共鳴する時代だったことに言及し、木戸孝允はそのプロテスタント精神を体現しているような新島に魅了された、と。司馬さんの言葉を借用すれば、「すっかり惚れ込んだ」というのです。ただ同書の新島紹介には必ずしも正確ではない部分もありますが、本当に興味深く読めます。

ともあれ、こんな風に新島の人柄には、学生であれ、明治の重鎮であれ、あるいはアメリカの人々であれ、誰をも引き付ける、何か大きな内に秘めたものがあつたように思うのです。

教育者として、信仰者として

さて、岩倉使節団のヨーロッパでの仕事を終えた新島は、勉強中のアメリカへと戻ります。そして牧師と宣教師の資格を取った後、明治の日本へ帰り、同志社を立ち上げ、教育と教会の働きのために、最期まで邁進するという生涯を過ごしたわけです。

この教育者であり、牧師であった新島襄の信念は、彼が書簡に記した次の言葉で言い表わされます。「自由教育・自治教会、両者併行、国家万歳」（④254）。

「自由教育」、自由を尊ぶ教育とはひと言で表現すれば、リベラル・アーツを重んじる教育、「知・徳・体」の調和を目指す人格教育ということでしょう。それと並行する「自治教会」とは、当時のアメリカのプロテスタント・会衆派（Congregational Church）の流れに基づく自主・自立の教会で、日本では古くは組合教会（日本組合基督教会）という言い方をしました。ここで、そのような自由を尊ぶ教育と自主自立の教会の両者が、まさに車の両輪のようになって働き、日本を近代国家へと大きく飛躍させるべく貢献することが主張されているのです。「自由教育・自治教会、両者併行、国家万歳」、そこに新島襄のヴィジョンが、また彼の確たる信念と信仰が表明されていると申しあげて良いと思います。

彼はそのような仕方で、教育に並行して教会、つまり宗教、信仰を大切に考えました。それは彼自身が自分を超えた大きな力・・・神の力、キリストの力に導かれ、支えられ、励まされつつ、未来に向かって、誠実に今を生きていた人に他なりません。新島の人間的魅力は取りも直さず、そんなところから醸しだされていたのではないのでしょうか。

「内」に働く神の力

読んで頂いたエフェソの信徒への手紙の箇所、ここには「祈りの言葉」が記されています。その締めにあたる部分をもう一度読んでみます。

20節から「わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に、教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン」。

ここから新島が大事にしていた信仰、信じていた神がどういう存在なのか、理解できると思います。その神とは、この聖書箇所に従うなら、自分たちの思いを「はるかに超えてかなえることのおできになる方」ということです。さらにその神の力がどこで働くのか。ここに「わたしたちの『内』に働く御力（神の力）」と記されています。「わたしたちの『内』に働く」、その神の力は、自分たちの『外』ではなく、それはまず私たちの『内』に、私たちの『内面』に働かれる、ということなのです。

16と17節の箇所には、このように書かれています。「どうか、御父（つまり神）が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように」と。

「神の力は内に働く」、したがって神さまの力が私たちの内に一杯に満ちて、私たちの内が強められるようにと、この言葉を聴く者は、聖書のこの手紙を書いた人によって、そのように祈られているのです。

そして、「内なる自分」が強められることは、「キリストを心の内（心の中）に住まわせる」ことであり、そのキリストの愛に根ざして立ち行けるようにと祈られる。神の力によって、その神の、キリストの大きな愛の力が根底となり、自らの基盤となり、その内なる神、内なるキリスト、内なる大いなる愛によって「徹底的に生かされて行って欲しい」と私たちは願われているのです。

こうお伝えしたら良いかも知れませんが、ここで聖書の言う「神」、「キリスト」とは、とどのつまりは自分を超えた大きな力、大きな命、大いなる愛を指し示す言い表しである、と。大事なのは、それによって「私たち一人ひとり、自らが生かされて行く」ということなのです。

キリスト愛を基盤に

ところで、この聖書箇所をもとに行った、新島の説教があります。原題は「愛とは何ぞや」、現代語にすると「愛とは何か」という説教です。これは新島が同志社の分校設立準備で仙台に向出した際、今からちょうど130年前、仙台市内の教会の日曜礼拝で行った説教です（1886年5月30日に仙台北教会で行った説教。②178～180より）。

その説教の出だしのところに、このような事が言われます。「『耶蘇教は何ぞ』と人、問われたらば、答えて曰わん、『愛、以ってこれを貫く』」。そうです。「キリスト教とは何か」と尋ねられたならば、迷わず「それは愛によって、徹頭徹尾貫かれているものだ」と自分は答えたい、と。もちろん、その「愛」とは、言うまでもなく神による愛・・・「神の愛」「キリストの愛」ということです。

それを分かり易く説明するために、新島はフランシスコ・ザビエルの「神の愛は造物（神によって造られたもの、被造物）より推して知れ」という言葉をあげて、神の愛は、人間の愛からも類推できるのではないかと、言われます。皆さんはアナロジー（日本語で類比）という言葉をご存知でしょうか。何かを説明するのに、身近な物事に喩えて理解を深める方法です。つまり、ここで神の愛を、人間の愛のアナロジーで語ろうと試みられるのです。新島は、その頃よく言われていた幾つかの話、歴史上の人物にまつわる話などを用いて、その愛に言及しました。

たとえば・・・南北朝時代の武将が主君のために身を捧げた逸話や、元禄時代に藩主の仇を討った忠臣蔵の物語。あるいは母親の一粒の涙による道楽息子の悔い改め・・・などを述べつつ、私たちはそのような人の愛に心動かされるものであると言えます。

もっとも神の愛、キリストの愛は、そのような人間の愛の用例だけで説明しきれものではありません。神の愛は、私たち人間の愛の段階に止まるものではない。それをはるかに超え

るものであることを彼は言うのです。聖書が教えるその愛の具体的な働きとは、正しい者にも、正しくない者にも雨を降らし、陽を照らす公平な愛であり、また「右の頬を打たれたら左をも差し出せ。一里行けと言われたら、二里行け。上着を取られたら、下着をも差し出せ」とキリストが教えられた所に見出される、と・・・。

さらに新島はこういう言葉を述べるのです。「キリストの愛は、広く、深く、高く、この愛を以ってこの世に来られ、この愛を以って神の道を説かれ、この愛をもって吾人（＝私たち）を救わんがために、棘の冠を甘んじ、十字架に磔（はりつけ）せられ、又、この愛を以って吾人を引き（＝私たちを導き）、この愛をもって今もなお、吾人の心に働く」そうです。「私たちの心のうちに働くのだ」と。

新島は自らの内に、このキリストの愛が働いていることを確信し、この愛、この大きな力に生かされ、またそれにしっかりと立って生き抜こうとした一人の日本人、国際人であったのです。彼は自らの内に住む大いなる力に生かされ、まさにキリストが、神が自らの魂の根底となり、自らの愛の基盤となり、その内なる神、内なるキリストによって力強く前進したのです。

「愉快なる時代」

もっとも、彼は決して体の丈夫な人ではありませんでした。否、若い時から実にさまざまな病気に悩まされることの多い人でした。新島は自らのことを「病魔の一囚人」と称するほどでした。目の病気、リュウマチ、心臓病、胃の病気など数え上げればきりありません。ですから、その外なる人は決して強くなかった。しかし、病気に負けてはいませんでした。静かに、かつ闘志を自らの内に秘め、これを克服しつつ、今という時を前向きに捉えて進み続けたのです。彼は「今」を「此の愉快なる時代はなかるべし」（②176）と語ります。病気にへこたれることなく、この言葉からも分かりますように、まさに「時代」に期待し、楽しみをもって、どこまでもポジティブに前を見上げ颯爽と進んだのです。

そしてその晩年、重い心臓病を抱えながらも、同志社を大学にするために力を尽くして東奔西走。そして、ついには出張先の群馬県前橋で倒れました。年の瀬の間近な時でした。そのため少しでも暖かい所での療養をすべく神奈川県の大磯へと移動します。で、その翌年の1890年、明治23年1月23日、新島はそこ大磯において亡くなるわけです。けれども、その年の正月元旦、亡くなる三週間ほど前ですが、新島はこういう内容の漢詩を読んでいるのです。

「去りし歳を悲しみつつ送るのをやめたい。病気で弱っている身に、ニフトリの鳴き声は、すでに良き日のおとずれを告げている。才気に乏しく、人々を助けるすべのないものだが、なお大きな計画、大いなる望みを抱いて、新春を迎えたのである」（私訳）、漢文で「なお壯図抱いて此の春を迎う」と（原文「送歳休悲病羸身 鷄鳴早已報佳辰 劣才縦乏濟民策 尚抱壯図迎此春」（⑤口絵写真）。どうでしょう。新島の熱い思いが、ここにみなぎっています。最後の最後まで希望に生きる、大いなる力、大いなる愛に生かされている彼の姿が、ここに垣間見えるように思われるのです。

ちなみに新島の葬儀においては、今日の聖書箇所、エフェソの信徒への手紙の3章が読み上げられています。そこに記された、そのとおりに、彼の人生は貫かれたのです。なお、新島が亡くなったその知らせを聞いて、最初に弔電を送ってきたのは、東京のある有名な仏教僧侶だったそうです。興味深く思います。このお坊さんは新島との出会いを思い起こしつつ、こんなことを記しています。「いかなる宗教であれ、宗教者はすべて先生のようにならねばなりません。・・・（中略）・・・先生に対する尊敬の念がまし加わるのを覚えます。本日訃報に接し、あの温容、やさしい言葉が私の目と耳にあらわれ、私の心は悲しみに満たされています」（J・D・ディヴィス『新島襄の生涯』北垣宗治訳 小学館 1977年135～136頁）と。何とも心温まる弔辞です。

聖書の示す神を信じ、それを語り、その愛の力、キリストの力に生かされていることを、どこまでも信じて歩んだ新島ですが、そこにあったのは決して独りよがりの狭い思い込みではなく、幅広い寛容な精神に基づくものであったことが分かるような気が致します。

「進め、平安の内に」

さて、ここでひと言だけ今日の奨励題について述べ、メッセージをしめたいと思います。「進め、平安の内に」、これは今から137年前の6月に行われた同志社の第一回卒業式で新島が述べた英語の言葉から取ったものです。新島は“Go, go, go in peace, be strong! Misterious Hand guide you”（⑧188）すなわち「進め、平安の内に行け。雄々しくあれ。奇しき神の御手が君たちを導かれる」（私訳）と述べて、15名の最初の卒業生を送り出しました。この言葉は礼拝の最後に牧師が述べる祝福の形式に則ったものですが、ここに新島の人生に対する信念と、祈りが示されます。「進め、平安の内に、雄々しく、心強く」、いかがでしょうか。それが、この場に集う私たち一人ひとりの上に、また同志社の上に大きく響き渡っているように思えてならないのです。

今、21世紀の世界を生きる私たちは、新島襄が生きたあの時代とはまた違った、さまざまな課題や問題に直面しています。この世界が、この国が、私たち一人ひとりが、そういった事柄に真摯に向かい合うためにも、いま一度、新島襄の生き方から学ばされることは多いように、私は思います。そして私たちも新島と同じように、どのような困難が自らの外側にあらうとも、それに押し流されないうで、内に働く大いなる力、大いなる愛に生かされていることを覚え、平安の内に雄々しく進んで行こうではありませんか。どこまでも希望を、ヴィジョンを捨てず、さらなる未来へ向かって・・・。